「足部スポーツ障害治療の科学的基礎」によせて

SPTSシリーズ第７巻「足部スポーツ障害治療の科学的基礎」は，足部アーチや前足部，後足部の動きとそれに伴う外傷・障害を，多方面から検討した価値ある１冊になったと思われる。

本書は第１章から第５章を15項目に分け，解剖学・運動学からインソールの有用性にいたるまでのスポーツ医科学的内容になっている。第１章は足部の解剖学・運動学とアライメント評価である。第２章とも関連するが，近年は高性能フルオロスコピーを使用し，足部の動きを2D- 3D registration法を用い，三次元解析する場合も多い。その意味で今回検索された文献が静的な画像評価のみであった点は残念である。アライメントの計測法と臨床評価の信頼性は低いが，診療時やリハビリテーション時によく用いられており，その汎用性は高いのでその一般的手法は学んでおく必要がある。第２章は足部のバイオメカニクスである。ここでは通常の手法でのバイオメカニカルな検討のほかに，骨マーカーでの計測結果も記載されており興味深い。ただ歩行中や走行中のみでなくジャンプ着地動作やカッティング動作に注目した研究の引用があればなおよかったと思われる。またインソール，テーピングの効用も文献的に検索されその有用性が述べられている。しかし引用文献がやや古く，2010年代の文献がほとんどないのが残念である。第３章は前足部の障害についてである。第7，第8，第９項目では，前足部によく生じる疾患の疫学，病態・診断，治療について記載されているが，オーバーラップする部分が多く，ほかの教科書同様，おのおのの疾患について疫学から治療までをまとめて記載する方法をとったほうが，よりわかりやすかったと思われる。またJones骨折は特に日本人に多発していることもあり，日本の文献も積極的に検索すべきかもしれない。第４章は中足部・後足部障害についてである。ここでは扁平足，疲労骨折，そして踵部痛の三大疾患のみを集中的に扱っており，その記載法も第３章と比較して適切でよくまとまっており有意義な章と思われる。第５章は関節運動連鎖，運動療法およびインソールの３項目よりなっている。関節運動連鎖はバイオメカニクスの章とも通ずるが，スポーツ復帰のリハビリテーションと関連づけて記載されているところに有用性がある。運動療法は有用な手法を多数の図入りで紹介しており興味深いが，この手法の有用性に関しての科学的評価が記載されていない点が残念である。足部アライメント不良に対するインソールの項は第３章のインソールの項とまとめて１つにするほうが読者にとってはありがたい。

以上，項目別に感じたことを列挙したが，論文を整理し各項目をまとめられた担当者および総括の蒲田先生に改めて感謝したい。なお第７巻目となった本書がいままで以上にスポーツドクター，アスレティックトレーナー，理学療法士に愛読されることを願う。

2012年９月

早稲田大学スポーツ科学学術院　教授　福林　　徹

SPTSシリーズ第7巻
発刊によせて

SPTSはその名の通り“Sports Physical Therapy”を深く勉強することを目的とし，2004年12月から企画が開始された勉強会です。横浜市スポーツ医科学センターのスタッフが事務局を担当し，2005年3月の第1回SPTSから現在までに8回のセミナーが開催されました。これまでSPTSの運営にご協力くださいました関係各位に心より御礼申し上げます。

この度，SPTSシリーズ第7巻を発刊させていただく運びとなりました。本書は第7回SPTS「足部スポーツ障害治療の科学的基礎」を内容をまとめたものとなっています。文献検索は，発表準備時期である2011年1月前後であり，その後本書の原稿執筆準備が行われた2011年8月ころに追加検索が行われました。したがって，2011年夏ころまでの文献レビューが記載されています。この第7回は東日本大震災の影響で，セミナーの開催を3月から8月に変更することになりました。震災の傷跡の癒えない時期の開催でしたが，200名近くの参加者を集め，盛会のうちに無事終えることができました。座長や発表者（執筆者）の先生方には，このようななかで大変なご尽力をいただきました。改めて深く感謝申し上げます。

足部は荷重運動において，ほぼ全体重を支える役割を果たします。その衝撃の分散や吸収機能に問題が生じると応力集中が起こり，疲労骨折，足部関節疾患，腱炎など疾患がもたらされます。一方，足部は力を伝達したり，バランスを保ったりする能力を備えています。これにより，二足起立位での身体活動が可能となっています。本書では，足部のバイオメカニクスを基盤として，診断学，疫学，病態理解，そして治療法を網羅するように配慮しました。しかしながら，疾患ごとにエビデンスに基づく治療法が確立されているとはいえず，すべての疾患についてエビデンスが得られるまでにはまだ相当な時間が必要と思われます。そのようななかでも，われわれが臨床や研究に取り組むうえでは，エビデンスレベルの低い研究やバイオメカニクスや疫学などの基礎的な研究結果を十分に理解しておく必要があります。

本書が，足部疾患のリハビリテーションに携わるすべての医療従事者や研究者のパートナーとなることを祈念しております。臨床家はもとより，論文執筆中の方，研究結果から臨床的なアイデアの裏づけを得たい方，そしてこれからスポーツ理学療法の専門家として歩み出そうとする学生や新人理学療法士など，多数の方々のお役に立つものと考えております。本書が幅広い目的で，多くの方々にご活用いただけることを念願いたします。

末尾になりますが，SPTSの参加者，発表者，座長そして本書の執筆者および編者の方々，事務局を担当してくださいました横浜市スポーツ医科学センタースタッフに深く感謝の意を表します。

2012年9月

広島国際大学保健医療学部総合リハビリテーション学科　蒲田　和芳

【SPTSについて】

SPTSは何のためにあるのか？　SPTSのような個人的な勉強会において，出発点を見失うことは存在意義そのものを見失うことにつながります。それを防ぐためにも，敢えて出発点にこだわりたいと思います。その質問への私なりの短い回答は「Sports Physical Therapyを実践する治療者に，専門分野のグローバルスタンダードを理解するための勉強の場を提供する」ということになるでしょうか。これを誤解がないように少し詳しく述べると次のようになります。

日本国内にも優れた研究や臨床は多数存在しますし，SPTSはそれを否定するものではありません。しかし，“井の中の蛙”にならないためには世界の研究者や臨床家と専門分野の知識や歴史観を共有する必要があります。残念なことに“グローバルスタンダード”という言葉は，地域や国家あるいは民族の独自性を否定するものと理解される場合があります。もしも誰かが1つの価値観を世界に押し付けている場合には，その価値観や情報に対して警戒心を抱かざるを得ません。一方，世界が求めるスタンダードな知識（または価値）を世界中の仲間たちとつくり上げようとするプロセスでは，最新情報を共有することによって誰もが貢献することができます。SPTSは，日本にいながら世界から集められた知識に手を伸ばし，そこから偏りなく情報を収集し，その歴史や現状を正しく理解し，世界の同業者と同じ知識を共有することを目的としています。

世界の医科学の動向を把握するにはインターネット上での文献検索が最も有効かつ効果的です。また情報を世界に発信するためには，世界中の研究者がアクセスできる情報を基盤とした議論を展開しなければなりません。そのためには，Medlineなどの国際論文を対象とした検索エンジンを用いた文献検索を行います。MedlineがアメリカのNIHから提供される以上，そこには地理的・言語的な偏りが既に存在しますが，これが知識のバイアスとならないよう読者であるわれわれ自身に配慮が必要となります。

では，SPTSは誰のためにあるのか？　その回答は，「Sports Physical Therapyの恩恵を受けるすべての患者様（スポーツ選手，スポーツ愛好者など）」であることは明白です。したがって，SPTSへの対象（参加者）はこれらの患者様の治療にかかわるすべての治療者ということになります。このため，SPTSは，資格や専門領域の制限を設けず，科学を基盤としてスポーツ理学療法の最新の知識を積極的に得たいという意思のある方すべてを対象としております。その際，職種の枠を超えた知識の共通化を果たすうえで，職種別の職域や技術にとらわれず，“サイエンス”を1つの共通語と位置づけたコミュニケーションが必要となります。

最後に，“今後SPTSは何をすべきか”について考えたいと思います。当面，年1回のセミナー開催を基本とし，できる限り自発的な意思を尊重してセミナーの内容や発表者を決めていく形で続けていけたらと考えております。また，スポーツ理学療法に関するアイデアや臨床例を通じて，すぐに臨床に役立つ知識や技術を共有する場として，「クリニカルスポーツ理学療法（CSPT）」を開催しております。そして，SPTSの本質的な目標として，外傷やその後遺症に苦しむアスリートの再生が，全国的にシステマティックに進められるような情報交換のシステムづくりを進めて参りたいと考えています。今後，SPTSに関する情報はウェブサイト（http://SPTS.ortho-pt.com）にて公開いたします。本書を手にされた皆様にも積極的にご閲覧・ご参加いただけることを強く願っております。